研究の成果

① 年間でPDCAサイクルを回すことの大切さ

1つの題材の中で、あるいは題材と題材など、年間を通してPDCAを回す事は、取り組んだ活動を次の場で生かすことができ、子どもたちの意欲を高めていく上で有効だった。目標に向かって何度も挑戦できるからである。

また、「ワークシート」「掲示」「写真」「アンケート」などの方法でPDCAを子どもたちに可視化していくことで、より分かりやすく、実感を伴った活動にすることができた。教師が年間でどのようにPDCAサイクルを回していくかという見通しを持ち、同じように子どもたちにも見通しを持たせていくことが大切である。

② 自己肯定感を育むための振り返りの場の工夫

クラスや学年の子どもたち同士でメッセージや賞を送り合うなどの相互評価の場を設定していくことで、お互いに感謝されたり良さを認められたりして自己肯定感が高まっていった。また、振り返る際にどのような点に着目して自分を振り返るのかという観点を明確に示し、振り返りカードやフォームなどで記入する時間を取っていくことが、自己肯定感を育むことにつながった。

一つひとつの題材における振り返りの時間は、自己を見つめる大切な時間になっていることが分かった。

③ 主体的な意思決定をするための教師の構え

児童生徒の思いを大切にして、様々な判断を子どもたちに委ねていこうとする教師の構えが主体性を育てていく上で有効だった。例えば、子どもの普段からの言動を活動に生かしたり、話し合い活動を取り入れたりした。

このように、思いや創意工夫が活動に反映されていくことで子どもたちの自己有用感と共に、自己肯定感が高まっていった。活動が停滞したときなどに、無理に教師が引っ張っていくことなく、子どもたちに意思決定を促す「どうする？」という言葉かけも、有効であった。

研究の課題

① 小中学校の実践の連携

小学校では、学級会を開催して合意形成を図りながら、自分たちで活動を計画・準備する経験をしてきている場合が多い。中学校では、それを知らずに指導に当たることがあるため、教師が必要以上に手を掛けすぎてしまうケースも少なくない。目の前の児童生徒がどんな経験をしてきているのか、同じ中学校区で実践を報告し合ったり、授業を参観したりすることで、9年間を見通した指導が実現すると考える。

② 主体的な活動の場を広げる取り組みの必要性

<学級から学年へ、学年から学校へ> 小学校の学級活動は担任が時間割を入れ替えることが可能で、必要に応じた話し合いなどの時間の設定がしやすいため、学級活動に取り組みやすい。しかし、中学校では実態として行事を中心として生徒会活動や学級活動が計画されていることから、小学校の段階から学級活動と行事の連携を図りながら、学年・学校を単位とした望ましい集団作りが一層必要である。大きな単位でも、一人一人が自己肯定感を感じられるような活動を展開する素地があれば、中学校での学校行事を中心とした特別活動を充実させることができると考える。また中学校でも、学級としての実践をさらに学年・学校への取組に広げるような仕組み作りをしていきたい。

③ 話し合いを深める工夫～望ましい集団として育つために～

話し合いでは、意見を共有して時間が終わってしまうこともあった。意見の違いから、さらによりよい考えを精査する場面に重点を置いて話し合うことが大切である。安易な多数決ではなく、話し合いのねらいに照らし合わせ、互いの思いを押し量りながらよりよい方向を見いだす思考過程こそ、個はもちろん集団としての育ちが期待できる。同時に教科の学習と連携を図り、対話的で深い学びの実現にむけ、互いの意見を深め合う場面を多く設定していければと思う。